

農政に尽くした人

大原幽学

(おおはら ゆうがく)

寛政9年〜安政5年(1797)〜1858)

道徳を基本とした性学を説き
先祖株組合をつくる

尾張藩(名古屋)家老大
道寺玄藩の次男として生ま
れる。18歳で勤王され、流
浪しながら学問を学んだ。
34歳のころ社会教化の実践
のため、信濃・江戸・房総
などを経て、天保3年(1
832)長沼村に入る。



北総を中心に性学という教養を興し、経済と道徳の調
和を説き、多くの門人を集めた。また、農村の荒廃を救
うために、先祖株組合(現在の農業協同組合)をつくっ
ている。

幽学は教養の行脚の途中に成田山をたびたび訪れてお
り、日記『道の記』(錦江堂日記ともいう)の中に、成
田山の様子を記した内容が残
されている。

弟子の五郎兵衛が残した日記



性学の門人となるための神文
(誓約書)

成田山ゆかりの人

三池照鳳

(みいけ しょうほう)

嘉永元年〜明治29年(1848)〜1896)

教育事業の振興
近代成田発展の礎を築く

成田市仲町に生まれ
る。成田山の住職とし
ては、初めての地元出
身者であった。

10歳で成田山に入り、
明治16年に35歳の若さ
で住職となった。時の
千葉県令(県知事)と親交を深め、当時官有林であった



明治18年深川永代寺の開帳の図

成田山の裏山の払い下げ
を受けて成田山公園を築
いた。また、成田鉄道の
敷設に向けて手腕を発揮
するなど、門前町の発展
に大きく貢献した。

その一方で、教育事業
にも熱心で、明治20年に
成田英漢義塾(現成田高
校)を設立し、また、同
21年には千葉にあった養
護施設を移し、成田山感
化院(現成田学園)とし
てスタートさせた。

成田山ゆかりの人

石川照勤

(いしかわ しょうきん)

明治2年〜大正13年(1869)〜1924)

成田山住職
成田山五大事業を完成する

佐倉市坂戸に生まれる。
望洋学人・亡羊と号し、
素人亭宗郎の俳号を
もつ。

25歳の若さで成田
山住職となり、約2年
間欧米各地を視察した。

帰国後地方文化の向上を説き、成田中学校(現成田高
校)、成田図書館(現成田山仏教図書館)、成田幼稚園
成田山感化院(現成田学園)、成田山女学校の五大事業
を完成させた。また、



成田山五大事業の完成を祝った記念冊子

信者のために成田山
公園の開設工事に着
手し、仏教青年会・
婦人会などを組織し
成田山の宗教的使命
達成と地方文化の向
上に多大な功績を残
した。

大正4年には五大事業の完成を祝って
記念開帳を行った。

成田山ゆかりの人

七代目 **市川團十郎** (いちがわ だんじゅうじゅういち)
 (1842~1859)

寛政3年~安政6年(1791~1859)

地方文化の向上に貢献した
 歌舞伎界の名優



市川家は屋号を成田屋と称する。七代目團十郎は10歳で團十郎を襲名し、伝統芸の荒事・世話物・時代物など幅広い芸域をもち、市川家歌舞伎十八番を制定した。近世演劇史上における名優と賞賛されている。歴代の團十郎と同様に成田山を深く信仰し、特に七代目の信仰はあつく、文政4年(1821)には額堂を寄進している。

天保13年(1842)水野忠邦の天保の改革による着物の取締り禁令に触れ、江戸十里四方追放を命ぜられ、成田山延命院に1年あまり身を寄せた。この間、成田屋七左衛門など名乗り、地元の人々に芝居や俳句を教えるなどして、地方文化の向上に大きく貢献した。



七代目市川團十郎の舞台の図

成田山ゆかりの人

松本良山 (まつもと りょうざん)
 (1800~1872)

寛政12年~明治5年(1800~1872)

仏師
 釈迦堂の五百羅漢を彫りあげる

船橋市湊町に生まれる。本名は金兵衛13歳のとき、家出して京都で仏師の修行を積む。師匠が病気の折、代作した作品の素晴らしい出来栄に、「良山」の号が与えられた。23歳で江戸に戻り、板彫りの研究を始める。彫りの深い立体的な良山の作品は江戸でも評判を高めていった。



10年の歳月をかけて彫られた五百羅漢

嘉永6年(1853)成田山が本堂(現釈迦堂)を再建するに際し、五百羅漢の下絵を狩野一信に依頼し、その下絵をもとに良山が彫刻するという仕事を持ち込まれた。良山は大野屋旅館の離れを借り、10年の歳月をかけて8枚の堂羽目(どうはねめ)を彫り上げる。多くの称賛を得た良山には、仏師として最高の地位「法橋」(ほうきょう)が授けられた。



「童子木像」良山作

宗教界で活躍した人

田中照心 (たなか しょうしん)
 (1852~1923)

嘉永5年~大正12年(1852~1923)

宗吾靈堂(東勝寺) 住職
 2度にわたり宗吾靈堂を建立

東京都中央区神田に生まれる。6歳のころから信仰心のあついであった。明治8年、下方村(現成田市下方)東勝寺の住職となるや、檀家を回り浄財を集め宗吾供養堂の拡張改築に着手した。総構造りの本堂、額堂、客殿事務所、五靈堂、宗吾霊客殿と次々に建立し、「佐倉三吾」の事蹟顕彰に努めた。



しかし、明治43年に門前に火災が発生したため、宗吾靈堂の建物はこごとく焼失してしまった。照心は本堂再興に粉骨砕身取り組み、その間、大正6年に東勝寺を現在の宗吾に移し、同10年落慶遷座の式典を挙げる。翌11年には現在の霊堂を完成させた。以来、信徒の数は増加の一途をたどり、宗吾靈堂としてのゆるぎない基盤をつくりあげた。



明治27年1月の宗吾靈堂境内図

照心は本堂再興に粉骨砕身取り組み、その間、大正6年に東勝寺を現在の宗吾に移し、同10年落慶遷座の式典を挙げる。翌11年には現在の霊堂を完成させた。以来、信徒の数は増加の一途をたどり、宗吾靈堂としてのゆるぎない基盤をつくりあげた。